

世界の廃墟をゆく

和洋廃墟比較文化考

ヨーロッパ編

写真原文・トマ・ジョリオン

「時を失った島」に迷い込んだ気分

12歳の頃だったか自転車で近所の廃屋に行き、悪友と窓枠をよじ上って中に入り込んで遊んだことがある。それが僕の廃墟原体験だ。

そして18歳になって初めてカメラを買った。小さい頃から大友克洋氏の「AKIRA」やリドリースコット氏の「BLADERUNNER」などを見て育ったせいで、カメラを持った瞬間、これで僕も何か表現ができるという気になった。たまたま近所に朽ち果てていく二軒の古城があったので、崩れ落ちる前に記録しておきたいと、ふと思っただ。初めて廃墟という被写体と向き合い撮影し、その写真ができたとき、僕の心の中は、写真の技術的なものを習得したという喜び以上に、廃墟に身を置いて写真を撮ったことの満足感で一杯だった。このようなジャン

Thomas Jorion

……トマ・ジョリオン

1976年パリ生まれ。保険会社勤務の後、写真家として独立。

4×5サイズのカラーネガフィルムを使って、

都市の廃墟や放棄された建築物を撮り続ける。

彼の作品は世にあるものと其の儚さを表現している。

写真集に「lots intemporels」、

「lots intemporels - second édition」、

「Timeless Islands 記憶の地図」がある。

<http://www.thomasjorion.com/>

Ricoprive, Italy, 2012.

ルの被写体を一生かけて撮り続けたいと誓ったのは、このときかもしれない。その後独力で、衰退する西ヨーロッパの工業地帯や、疲弊する旧ソビエト衛星国の街を調べた。歴史を顧みるといつの時代にも廃墟というものが存在する。それらは取り壊され新しい建物へと生まれ変わっていくべきなのか、それとも過去の英知の結集として保存していくべきなのか？ 廃墟に身を置くと、時間というものは、すべてが同じペースで流れているのではないことに気がつくだろう。廃墟での時間はゆっくりと流れ、世の中から隔絶された「時を失った島」に迷い込んだ気分になる。

（訳文）



Unknown place, 2010.



Basketball, Germany, 2010.



Obilazak, 2011



Raccolta, Italy, 2009.



Wanne, Germany, 2011.